

仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査

齊藤 鉄也^{1,a)}

受付日 2017年5月8日, 採録日 2017年11月7日

概要: 本論文では, 古典籍に用いられている仮名字母の出現傾向を利用し, その資料の書写者の推定や年代の推定を行った調査結果を報告する. 具体的には, 書写者や年代ごとに資料を分類することを目的に, 同音の仮名字母の出現頻度率を特徴量とし, 藤原定家とその近親者や側近の人物が書写した資料の調査を行った. その結果, 定家筆の一部の資料が, 他筆の資料と分類できる可能性があること, 定家筆の資料の中では, 年代に近い資料が分類できること, が明らかになった. 本提案手法により, 古典籍の資料の書写者の推定や年代の推定を行い, 古典籍の研究の基礎となるデータの蓄積とそれを活用した研究の進展が期待できる.

キーワード: 藤原定家, 写本, 仮名字母, クラスタリング, 年代推定

Survey of Fujiwara no Teika Manuscripts by Kana-character Variation

TETSUYA SAITO^{1,a)}

Received: May 8, 2017, Accepted: November 7, 2017

Abstract: This study investigates the possibility of employing observed trends in a literary manuscript's usage of kana-character variants (jibo) as a valid parameter for making judgments about that manuscript's likely age and copyist. In particular, I surveyed various manuscripts copied by Fujiwara no Teika, members of his household, or close relatives of his, and attempted to differentiate these manuscripts by age and copyist using only their respective kana-character variation trends as a parameter. The results obtained demonstrated that this parameter did allow the differentiation of some manuscripts by Fujiwara no Teika from those by other hands, as well as differentiation among Teika autograph manuscripts by proximity of copy-date. This proposed method demonstrated potential in estimating the copyist and copy-date of literary manuscripts, as well as potential for the accumulation of basic data for literary study, and its utilization in further research.

Keywords: Fujiwara no Teika, manuscripts, Kana-Character variant (jibo), clustering, dating

1. はじめに

多くの古典籍の本文を比較すると, 筆跡が多様であると同時に, そこに出現する変体仮名が資料ごとに異なることを理解できる. たとえば, 源氏物語の桐壺といった同一の作品の写本であっても, 写本ごとに本文に用いられている変体仮名は異なる. この, 本文中に大量に出現する変体仮名を計量的に分析し, 知見を得ることが可能であるならば, 書写者や書写年代に関する情報が限られている古典籍の研

究に進展が期待できる. さらに, 文学や文献学とは異なる根拠で, 蓋然性の高い仮説を提案することができるならば, 関連する分野への貢献が期待できる.

本研究では, この変体仮名の出現傾向を用いて, 同一人物によって書写された複数の資料を対象に, 書写者による分類の可能性と, 同一の書写者の場合であれば, その書写年代による分類の可能性を, 計量的手法を利用して調査している. 本論文では, 4章で藤原定家(1162–1241)と定家の近親者, 側近の複数の人物が書写した資料を紹介し, 5章でそれらの本文の大部分を占める仮名字母の出現傾向のデータの収集方法を述べ, 書写者による資料の分類と書写年代の推定の調査結果を6章と7章で報告する.

¹ 淑徳大学
Shukutoku University, Iruma-gun, Saitama 354–8510, Japan
^{a)} saimune@u.shukutoku.ac.jp

その結果、調査した資料に関しては、定家筆の一部の資料と他筆の資料は異なる群に分類できること、前稿 [1] と同様に、定家筆とされる資料のうち、天福年間 (1233-1234) またはそれに近い時期に書写されたと考えられる資料が群に分類できること、定家筆ではない場合であっても、定家筆を忠実に書写したと考えられる資料は、親本の書写年代に近い群に分類できること、が明らかになった。手法に関しては、階層的クラスタ分析を用いる場合に、資料間の距離の計算結果の変動が安定するために必要な文字数が明らかになった。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、変体仮名の出現傾向を用いた計量的な手法により、古典籍の著者または書写者やその書写年代の推定を行うことである。そこで、本研究では、古典籍に特徴的に用いられている、変体仮名の元となった漢字である字母に着目した。その理由には、変体仮名が古典籍の和歌集や、日記や物語といった散文の本文に主に用いられ、大量に存在していること、近年、書籍の出版やインターネット上での古典籍の公開が進み、写本の画像の利用が容易になった結果、変体仮名の調査が容易になったこと、変体仮名の字母は、その字形の差に関係なく、写本から客観的な基準を用いて収集が可能であること、がある。

本調査では、調査対象の書写資料として、書写した古典籍が現在まで多く残り、かつ、出版されている資料が多く、利用が相対的に容易である藤原定家の著者自筆本と書写本を用いた。定家の資料を対象とする利点として、国文学分野において研究成果が蓄積され、その成果と組み合わせた研究の進展が期待できることがある。

前稿 [1] においては、この変体仮名の字母の出現傾向に着目し、定家の自筆本と定家が書写したとされる書写年代が明らかな写本を中心とした計 10 資料を対象に、その年代推定を試みた。階層的クラスタ分析と主成分分析を用いて分析した結果、対象とした資料は 2 つの群に分類することができること、群のうち 1 つは天福年間に書写された資料が集まること、加えて、その群ごとに特徴的な出現傾向を持つ仮名字母が存在すること、を指摘した。本論文では、定家筆に加えて定家の近親者や側近の人物まで範囲を広げた計 38 資料を対象として、定家筆と他筆とされる資料の分類と、書写年代について調査した結果を報告する。

3. 関連研究

これまで仮名字母に着目した調査は、国語学と文献学の分野において、それぞれ別個に行われてきた。どちらの分野においても、計量的な手法を用いて分析する研究は少ない。これらの研究は、個別の字母に着目した研究と、すべての字母の出現傾向に着目した研究に分類できる。

個別の字母に関して出現傾向を指摘する研究では、矢田 [2]

において、特定の字母はある時代に限定して出現する、との指摘がある。また、特定の作品の字母の出現傾向を指摘し、年代推定や著者推定を行う研究もある。表ら [3] では、世阿弥の資料を対象として、特定の字母が、語頭や語中、文頭といった特定の位置に出現することを指摘し、その結果を用いた自筆と他筆の分類を行っている。

すべての仮名字母の出現傾向から書写者や書写年代を推定した研究では、同音の仮名字母の出現頻度率に着目し、その特徴から書写者や書写順序の推定を試みている。小松 [4] では、後撰和歌集のある資料の書写者の推定を試み、他の資料の筆跡との比較から、書写者を推定している。この際に、筆跡とは異なる根拠として、各資料の字母の出現頻度率を求め、その数値を比較し、その類似性を指摘している。しかし、その類似性を測る計算方法に関しては記述がなく、計量的な手法では分析されていないと考えられる。井浦 [5] では、定家に関連した計 21 資料の持つ字形の出現頻度率を求め、書写者と書写年代の推定を試みている。この研究では、資料間の距離に基づいて各資料を 4 人の書写者に分類した。このうち定家筆とされる資料に関しては、距離を用いた書写順序の推定も試みている。しかし、その推定結果は明確ではなく、年代推定は今後の課題としている。

本研究は、後者の研究を進め、定家関連の計 38 資料を対象とし、同音の仮名字母に対して、その出現頻度率を求めた。分析に際しては、対象とする資料には書写者や年代が不明の資料が多く含まれることから、そのデータに対して教師なし分類手法である階層的クラスタ分析と主成分分析を用いて考察している。その結果から、計量的な手法に基づき定家筆資料が 3 つの群に分類できることに加えて、一部の資料に関しては書写年代の推定可能性を指摘していることが、これまでの研究とは異なっている。また、クラスタ分析を用いた場合に必要な文字数を明らかにし、その手法を用いる場合の条件を明らかにした。

4. 調査対象とした資料

本調査では、出版されている和歌と散文の資料を対象とした。定家の書写活動を述べるのが目的ではないため、資料に関しては、本調査に必要な情報だけを表 1 にまとめた。それら資料の中には、新しく調査対象として追加した資料に加えて、調査対象範囲を広げ、文字数を追加したことから、前稿 [1] で用いた資料も記載している。

対象とした資料の中には、勅撰和歌集や私家集といった和歌集、日記や物語といった散文があり、定家の著者自筆資料も含む。定家書写の勅撰和歌集には、古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集がある。これら以外の和歌集は私家集である。定家書写の散文には、土左日記、更級日記、源氏物語の柏木がある。定家の著者自筆資料には、和歌集として拾遺愚草 (上) (中) (下)、散文として近代秀歌の歌論部がある。このほかに、漢文を書き下した石清水八幡宮権

表 1 調査対象とした藤原定家と近親者、側近の人物の書写資料
Table 1 Manuscripts surveyed by Fujiwara no Teika and others.

資料名	(推定) 書写年代	対象本文範囲および出典	仮名文字数	仮名字母数
殷富門院大輔百首題	1187 頃か	全文 [6]	2,635	90
源通具俊成卿女歌合	1202 以前	11 頁分 [7], [8]	1,402	74
石清水八幡宮権別当田中宗清請願文案	1223/10	全文 [9]	3,048	70
古今和歌集-伊達本	1223/7 以降 1226/4 以前	卷三夏まで [10]	10,642	91
古今和歌集-嘉禄二年四月本	1226/4/9	卷六冬まで [11]	15,776	93
更級日記	1230/6/17 以降	全文 [12]	23,977	105
拾遺愚草 (上)	1232/7 以降 1233/10 以前か	50 丁裏まで [13]	10,639	99
拾遺愚草 (中)	同上	59 丁表まで [13]	9,848	103
拾遺愚草 (下)	同上	70 丁裏まで [14]	11,416	101
拾遺和歌集-天福元年本	1233/8	卷八雑上まで [15]	17,097	108
後撰和歌集-天福二年本	1234/3/2	卷八冬まで [16]	16,709	105
土左日記	1235/5/13	全文 [17]	10,771	111
一宮紀伊集		全文 [18]	2,994	83
奥義抄下巻餘		36 丁裏まで [19]	7,260	94
近代秀歌-歌論部		全文 [20]	1,423	75
近代秀歌-和歌部		全文 [20]	1,584	84
源氏物語-奥入-大橋本-定家筆部		全文 [21] ([22] に基づく定家筆の仮名を対象)	9,523	97
古今名所		全文 [9]	507	62
実方集		全文 [18]	1,375	71
四条中納言集		全文 [23]	9,208	91
惠慶集 (上)-定家筆部		全文 [24] (21 丁表 1 行まで)	3,672	97
惠慶集 (上)-伝民部卿局筆部		全文 [24] (21 丁表 2 行から)	1,546	69
源氏物語-柏木-定家筆部		全文 [25] (11 丁裏 5 行まで)	3,247	88
源氏物語-柏木-他筆部		全文 [25] (11 丁裏 6 行から)	13,459	83
讃岐入道集-定家筆部		全文 [26]	1,394	84
讃岐入道集-他筆部		全文 [26]	3,442	96
定家小本-定家筆部		全文 [9]	252	52
定家小本-他筆部	1232/6 以降 1235/3 以前か	全文 [9]	4,446	75
古今和歌集-貞応二年本	1223/7/22 (1267/7/22)	卷三夏まで [11]	10,584	89
伊勢物語-学習院大学本	1234/1/20 (1507/5 頃か)	全文 [27]	20,905	113
伊勢物語-御所本	1234/1/20 (1547/1/下旬)	全文 [28]	20,894	112
古来風林抄-俊成	1197/7/20 頃	上巻 [29] (33 丁表 7 行まで, 76 丁裏から巻末)	16,691	86
周防内侍集-俊成		全文 [30]	5,051	68
兼輔中納言集-坊門局		全文 [31]	4,739	83
平兼盛集-坊門局		23 丁表まで [31]	5,072	82
続後撰和歌集-為家	1255/5/16	卷四夏まで [32]	7,380	100
新勅撰和歌集-伝為家筆部		22 丁表まで [33]	3,373	90
秋篠月清集-伝民部卿局	1228/5/2	41 丁表まで [34]	7,666	77

別当田中宗清請願文案もある。

今回の調査で、著者自筆資料と書写資料、和歌と散文、勅撰集と私家集といった多様な種類の資料を対象とした理由は、資料の種類が相違が字母の出現傾向に及ぼす影響の考察ができるからである。たとえば、勅撰和歌集と私家集において、定家の字母選択の方針が異なるとすれば、その相違が出現傾向に反映される可能性がある。これは自筆本と書写本、和歌と散文といった資料間の相違に対しても同様である。多様な資料を調査対象とすれば、これらに存在する相違の有無や程度を明らかにすることが期待できる。

これらの定家筆資料のほかに、古今和歌集貞応二年本と2つの伊勢物語がある。これらは、それぞれの資料の解題には、定家筆資料を忠実に書写しているとの指摘があるため、調査対象としている。また、定家と近親者および側近の人物の字母の出現傾向を比較するために、定家の父であ

る俊成、姉である坊門局、息子である為家、定家の書写活動に参加した伝民部卿局を含む複数の人物を対象とした。

資料名には、作品名と、同じ作品名を区別する写本名を用いている。同一の資料の一部を定家が書写し、残りを他の人物が書写した資料の場合は、資料名の後に「定家筆部」または「他筆部」と付加している。複数の資料に他筆部が存在するが、これらの他筆部の書写者が同一人物とは限らない。他筆部に資料の解説に伝承筆者が記載されている場合は、その書写者を用いている。

表 1 では、比較を容易にするために書写年代または推定書写年代を西暦で記載している。書写年代が空欄の資料は書写年代が不明であることを表している。対象本文範囲については、勅撰和歌集といった文字数が多い作品の場合、その一部を対象としている。仮名文字数とは、調査対象とした本文の範囲の文字数である。最後に、その範囲に出現

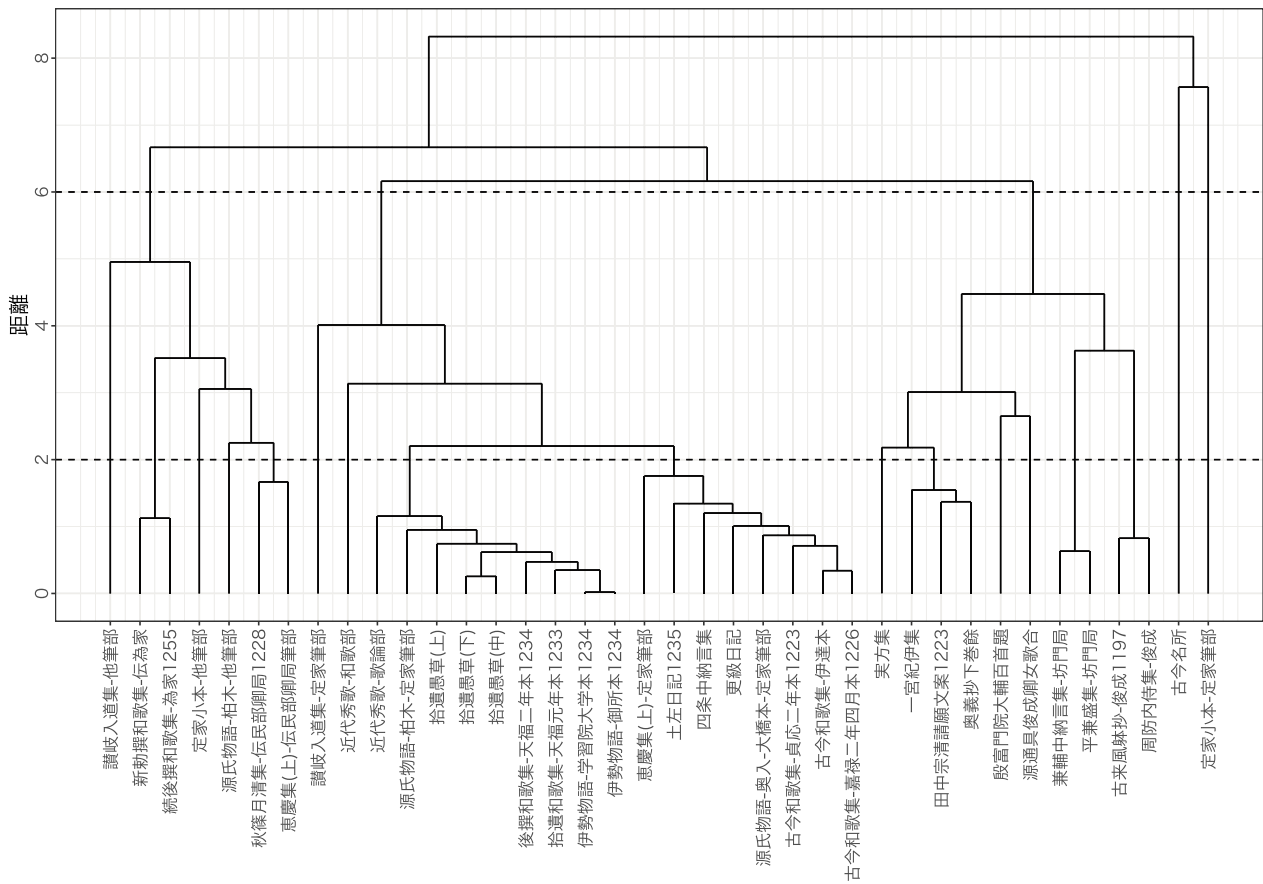


図 1 全書写資料に対する階層的クラスタ分析結果

Fig. 1 Hierarchical cluster analysis of all surveyed manuscripts.

した仮名字母の種類の数と仮名字母数としてまとめている。

5. 調査方法

仮名字母の採字方針は、前稿 [1] と同様であり、その概要をまとめる。調査対象とする仮名は、本行本文の仮名とする。文字が削除や修正されている場合は、削除や修正前の文字を対象とする。目移りや見落としにより挿入されている文字列は採用していない。

調査対象とした変体仮名の字母の数は、くずし字辞典 [35] から採用した 369 種類である。仮名と漢字の区別は、その字母に該当する 1 音で読む漢字は仮名として、複数の音で読む漢字は漢字として採字している。

採字した仮名は、字母単位で頻度を集計した後、同音の仮名字母ごとに出現頻度率を求める。その出現頻度率を、仮名字母の出現傾向として考え、分析対象のデータとする。

調査方法として、データの持つ特徴に基づいて分類する教師なし分類手法を用いる。字母を用いて資料の分類を行う場合には、親本の種類や定家の書写方針により、書写された資料の字母の選択が影響を受ける可能性がある。しかし、それらの影響の有無とその程度は事前に明らかではない。このため、教師なし分類手法であるクラスタ分析と主成分分析を用い、分類結果からそれら影響を考察する。

6. 階層的クラスタ分析の結果と考察

最初に、階層的クラスタ分析を用いて、資料間の全体の構造を概観し、その結果が構成する群を確認する。次に、構成された群が共通の性質を持つ場合には、さらに主成分分析を用いて分析する。

6.1 階層的クラスタ分析の結果

階層的クラスタ分析のデータ間の距離の計算方法とクラスタの構成方法は複数提案されている。ここでは、距離の計算方法として IR 距離 [36] を用いて、クラスタの構成方法は加重平均法を用いて行う。

全資料に対する階層的クラスタ分析の結果を図 1 に示す。図 1 では、書写年代が明らかな資料名には書写年代を資料名に追加している。資料名が長いため、「石清水八幡宮権別当田中宗清請願文案」は、「田中宗清請願文案」として省略して記載している。

最初に、クラスタ分析結果を概観する。階層的クラスタ分析結果である図 1 から、距離 6 の高さで分割すると、大きく 3 つの群と 2 つの資料に分けることができる。それぞれ左から順に、左に位置する他筆の資料が集まるクラスタ、中央左に位置する定家筆の資料が集まるクラスタ、中央右に位置する定家筆の資料と、俊成と坊門局の資料が集

まるクラスタである。右に、古今名所と定家小本-定家筆部が位置している。

より詳細にクラスタを検討すると、定家筆ではない他筆の中で、同一の人物による筆跡かと考えられる資料が小さなクラスタを構成していることも明らかになった。具体的には、他筆の資料が集まる左側のクラスタでは、為家が書写したとされる資料からなるクラスタと、伝民部卿局と呼ばれる側近が書写した資料からなるクラスタが存在する。伝民部卿局に近い位置に存在する、源氏物語柏木-他筆部と定家小本-他筆部に関しては、伝民部卿局と同筆であるかは明らかではない。加えて、中央左の定家筆のクラスタには、天福年間に書写された資料が存在するクラスタと、3つの古今集が存在するクラスタ、それ以外の資料がある。また、中央右に位置するクラスタの中では、俊成と坊門局がそれぞれクラスタを構成する。このことから、図1では、点線の距離2の高さで分割し、分析結果を考察することとした。

6.2 階層的クラスタ分析の考察

階層的クラスタ分析の結果からは、定家筆の書写年代が近い資料が集まるクラスタが存在すること、同筆とされる他筆の資料もクラスタを構成すること、が明らかになった。これは、同音の仮名字母ごとの出現頻度率を用いて、定家の書写資料を分類できる可能性を示している。

最初に、中央左の定家筆からなるクラスタに関して検討する。この定家筆のうち、左側に位置している讃岐入道集-定家筆部と近代秀歌-和歌部は、その他の資料と距離が遠く、クラスタに所属していない。それ以外の2つのクラスタは、書写年代が不明である源氏物語柏木-定家筆部と近代秀歌-歌論部の資料を除き、天福年間もしくはそれに近い時期に書写されたとされる資料が集まるクラスタと、3つの古今集が分類されているクラスタからなる。

3つの古今集が分類されているクラスタは、1226年に書写されたことが明らかな古今集嘉禄二年四月本と、1235年に書写されたことが明らかな土左日記が存在している。そのため、年代の点からこのクラスタの共通点を述べることはできない。このクラスタの中では、3つの古今集は書写年代が近く、距離も近くに分類されている。このうち、古今集貞応二年本は、解題[1]に基づく定家筆ではなく、定家筆の古今集を孫である覚尊が書写した資料であり、その筆跡はまったく異なる。しかし、字母の出現傾向の点からは、他の定家筆と差がないほど近い距離に存在することから、定家筆の古今集を忠実に書写した資料であることを表している、と考えることができる。

中央右に位置するクラスタに所属する定家筆の資料は、中央左に位置する定家筆の資料が集まるクラスタと比較して、異なる字母の出現傾向を持つ、といえる。それらの資料は、他筆である俊成や坊門局の資料に相対的に近い距離

に存在している。これらの資料のうち、一宮紀伊集、田中宗清請願文案、奥義抄下巻餘はクラスタを構成している。この田中宗清請願文案は古今集貞応二年本と同年に書写されているが、異なるクラスタに位置している。このことから、同年代に書写された資料であっても、異なる字母の出現傾向を持つ資料が存在することが明らかになった。

これ以外の定家筆の資料である、殷富門院大輔百首題や源通具俊成卿女歌合、実方集、右に位置している古今名所や定家小本-定家筆部に関しては、クラスタを構成せず、その関係は明らかではない。

6.3 本文の文字数と距離の関係の考察

階層的クラスタ分析結果において、定家筆のうち、他の資料と距離が遠く、クラスタを構成していない資料は、どれも相対的に文字数が少ないという共通点がある。資料の文字数が少なければ、出現頻度率の偏りが大きくなると予想されることから、資料の本文の長さや資料間の距離の関係を明らかにする必要がある。また、大規模な作品の場合、文字数が増えるに従い資料間の距離の変動が小さくなり、収束することが予想できる。この文字数が明らかになれば、大規模の作品を対象とした調査の効率化が可能である。これらのことから、文字数に対して、距離の計算結果の変動が安定する文字数を調査する。

調査対象として、資料の対象本文範囲の文字数が多い散文の例として更級日記を、和歌集の例として後撰集天福二年本を選択し、本文の文字数とその距離の変化を調査した。距離の計算方法は、これまでと同様にIR距離を用いた。比較対象とした資料は、表1から本文長が異なる資料を選択した結果、仮名文字数が、252文字の定家小本-定家筆部、507文字の古今名所、1,375文字の実方集、2,635文字の殷富門院百首題、3,247文字の源氏物語柏木-定家筆部、7,260文字の奥義抄下巻餘、11,416文字の拾遺愚草(下)、17,097文字の拾遺集天福元年本、の計8資料とした。

最初に更級日記と各資料のIR距離の比較結果を図2に示す。図2では、更級日記の本文の長さをX軸とし、各資料との距離をY軸としている。図2は、文字数が増えるに従い、距離が近くなることを示している。おおよそ2,500文字までは距離の変動が激しく、2,500文字を超えるあたりからその距離の変動が安定し、5,000文字を超えるとほぼ一定の距離となることを示している。

次に、同様の方法を用いて、後撰集天福二年本についても調査した。後撰集天福二年本と各資料のIR距離の結果を図3に示す。図3も更級日記と同様に、2,500字を超えるあたりからその距離の変動が安定することを示している。

この結果から、更級日記と後撰集天福二年本の本文の長さが2,500文字に満たない場合には、どの資料とも距離が遠いことが明らかになった。また、どちらの資料もともに本文の長さが5,000字以上であっても、定家小本-定家筆部

や古今名所、実方集といった2,500字に満たない資料とは、距離が遠い計算結果となった。このことから、定家の資料において、同音の仮名字母の出現頻度率を用いた階層的クラスタ分析を行うためには、少なくとも2,500字以上の資料を用いて距離を計算する必要がある、5,000字以上の資料であれば、それ以上の文字数は必要ない可能性がある。資料間の距離は、資料の文字数と仮名字母の出現傾向の2つの要因が影響を与えていることが明らかになった。

この結果を用いて、改めて図1を考察すると、定家筆資料である定家小本-定家筆部、古今名所、源通具俊成卿女

歌合、実方集、近代秀歌-和歌部、讃岐入道集-定家筆部といった資料は、どれも2,500字に満たない。また、殷富門院大輔百首題も2,635文字の資料であり、2,500字に近い。そのため、これらの距離の計算結果の遠さが、文字数が少ないことが原因であるか、それとも字母の出現傾向が異なることが原因であるか、明らかではないことになる。これに対して、近代秀歌-歌論部は、1,423字と文字数が少ないが、他の資料との距離の計算結果が近く、天福年間に書写された資料と同じクラスタに所属している。この場合は、字母の出現傾向が近いことが原因であると考えられる。

7. 主成分分析の結果と考察

階層的クラスタ分析の結果からは、定家筆の一部と他筆の資料は異なる群に分類できる可能性と、定家筆の資料のうち、書写年代が近い一部の資料は同じ群に分類できる可能性が明らかになった。これらの点に関して、主成分分析を用いて確認する。

7.1 主成分分析の結果

主成分分析を行う前に、調査対象としている369種類の字母のうち、出現しない字母と、多くの資料で出現率が100%に近く、資料間で差がない字母を除外した。加えて、同音の仮名字母の中で相関が高い2つの字母は、どちらか一方を分析対象から除外した。その結果、計90字母が分析対象となった。主成分分析の結果を図4に示す。主成分分析では、相関行列を用いて行い、第1主成分の寄与率は14.0%、第2主成分の寄与率は11.9%であった。

主成分分析の結果は、さらに二次分析として非階層的ク

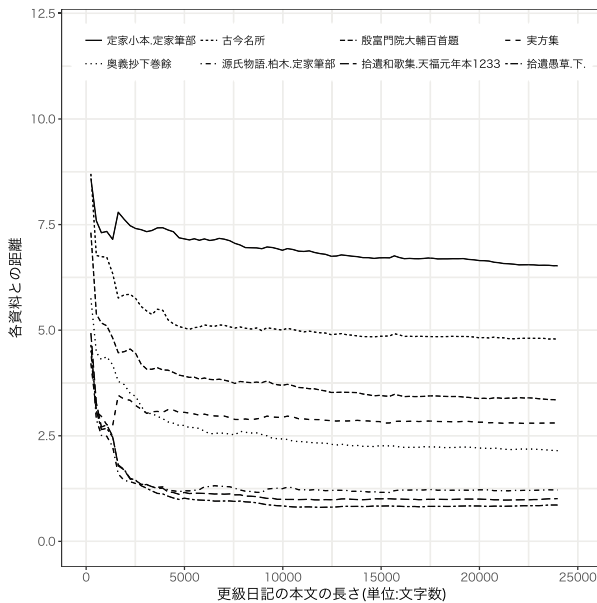


図2 更級日記と8写本のIR距離

Fig. 2 IR distance between Sarashina nikki and 8 other manuscripts.

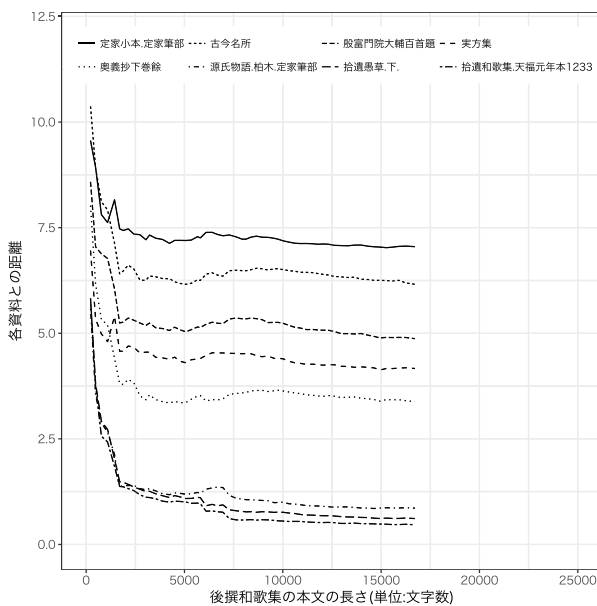


図3 後撰和歌集と8写本のIR距離

Fig. 3 IR distance between Gosen wakashu and 8 other manuscripts.

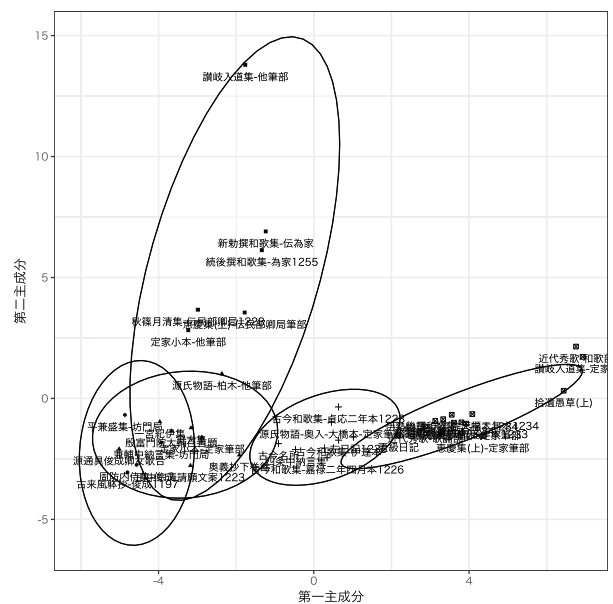


図4 主成分分析の結果

Fig. 4 Principal component analysis plot of all surveyed manuscripts.

ラスト分析である k 平均法を用いて分類した。その結果も、各群に対応する 95%信頼楕円を用いて、図 4 に示した。

図 4 では、第 1 主成分に関しては、正の値が増加する方向に定家筆の資料が集まっている。この点からは、合成変数である第 1 主成分は、定家筆の資料の持つ字母の出現傾向の特徴を表していると考えられる。これに対して、第 2 主成分に関しては、正の値が増加する方向に他筆の資料が点在する。そのため、他筆の資料の持つ字母の出現傾向の特徴を表しているとも考えられる。しかし、これらの資料は同一人物によって書写されている資料ではないので、第 2 主成分の解釈は明らかではない。

二次分析の結果である信頼楕円に着目すると、楕円は全部で 5 つ存在する。これらを右から順に述べる。右側に位置する楕円は定家筆のうち天福年間に近い時期に書写された資料が集まる楕円である。中央に位置する楕円は 3 つの古今集が集まる楕円である。これらの第 1 主成分が 0 から正の値の方向に位置している 2 つの楕円は、階層的クラスタ分析結果とはほぼ対応している。特に、主成分分析の結果、天福年間に近い時期に書写された資料が第 1 主成分においてより正の値が大きい側に集まっている。その点で、天福年間に近い時期に書写された資料が最も特徴的な字母の使い方を示している、といえる。この結果は、前稿 [1] の結論である、天福年間またはそれに近い時期に書写された資料が分類できることを支持している。

左側に位置する 3 つの楕円は、それぞれ、為家や伝民部卿局といった他筆の資料が集まる最大の楕円、俊成や坊門局の資料が集まる縦長の楕円、それらの楕円と重なる部分が多い、定家筆の横長の楕円である。特に、俊成と坊門局の資料は定家筆資料と重なっている。また、源氏物語柏木-他筆部は定家筆と同一の群に属している。このことから、ここに位置している定家筆の資料に関しては、他筆と分類ができない資料であるといえる。

7.2 主成分分析の考察

主成分分析の結果からは、定家筆の資料は 3 群に分類され、それらの 3 群は、ほぼ階層的クラスタ分析の結果に等しい、といえる。定家筆の資料は、天福年間に近い時期に書写された 13 資料と、3 つの古今集を含む 7 資料、それ以外の 7 資料に分類された。主成分分析と階層的クラスタ分析の結果が異なった資料のうち、更級日記と恵慶集(上)、近代秀歌-和歌部、讃岐入道集は、天福年間に近い時期に書写された資料の群に、古今名所は 3 つの古今集が集まる群に属した。これら以外の資料は、他筆の群と重なる、定家筆と他筆で区別できない群に属している。

この分析の結果からは、天福年間に近い時期に書写された資料の群と 3 つの古今集が集まる群が他筆と異なる群を形成し、定家筆の資料のうち一部の資料は、字母の出現傾向が異なり、今回調査対象とした他筆と分類できる、とい

える。さらには、それらの資料の共通の性質として年代を持つ可能性があることを示している。特に、天福年間に近い時期に書写された資料は特徴的な字母の出現傾向を持つ、といえる。この時期の書写された資料は、他の定家筆の資料と比較して、定家が特徴のある字母の選択をして、書写した可能性を示している。

7.3 出現傾向に差がある字母の考察

主成分分析の結果のうち、天福年間に近い時期に書写された資料が集まる群と 3 つの古今集が集まる群は、近親者を含む他筆からなる群とも重ならず、特徴的な字母の出現傾向を持つといえることから、これら 2 つの群に対して、出現傾向に差がある字母を調査した。

調査はウェルチの t 検定を用いて、90 字母に対して平均の差を検定した。1%有意で差がある字母は「け」と読む「遣」、「さ」と読む「佐」、「し」と読む「志」、「す」と読む「春」、「た」と読む「堂」、「ひ」と読む「飛」、「ま」と読む「満」の計 7 字母である。どの字母も天福年間に近い時期に書写された資料が集まる群において、その出現率が相対的に高い。これらの中で最も差があった字母は「春」であり、これを例として出現傾向の差を述べる。資料中に出現した「す」と読む字母は「寸」「春」「寿」「須」「数」である。このうち相対的に出現頻度率が高い字母は「寸」「春」「須」であり、天福年間に近い時期に書写された資料が集まる群では、「寸」が 70.9%、「春」が 24.9%、「須」が 3.6%であった。これに対し、3 つの古今集が集まる群では、「寸」が 89.0%、「春」が 0.6%、「須」が 8.3%であった。

この字母の出現頻度率に関する知見を用いることで、定家筆に関係した資料の仮説を提案することができる。たとえば、ある定家筆資料に対して、これらの 7 字母を含む同音の仮名字母の出現傾向を調査し、その結果がこれら 2 つの群のどちらかと同様の出現傾向を示すのであれば、その資料は少なくともある時期の定家筆の資料の可能性があると指摘することができる。

8. まとめ

本論文では、仮名字母の出現傾向を用いた、書写者と年代の推定の可能性を調査した。その対象として、資料が多く残る、藤原定家とその近親者、側近により書写された和歌集と、日記や物語といった散文を選択した。計 38 資料を対象とした階層的クラスタ分析と主成分分析の結果から、定家筆の一部の資料と他の人物の資料を分類できることを示した。また、定家筆の天福年間に近い時期に書写された資料が集まる群と 3 つの古今和歌集が集まる群を分類する特徴的な出現傾向を持つ字母を明らかにし、この知見を用いた年代の推定の可能性も明らかになった。

この結果、勅撰集と私家集、自筆本と書写本、和歌と散文といった資料の種類に関係なく群が構成されていること

から、定家は、自分自身の字母選択方針に基づいて資料を書写している可能性がある。これは、定家は親本の字母まで保存して書写する「不違一字」の方針は採用していない、という指摘 [37] と同様の結果となった。一方で、天福年間に近い時期に書写された資料が群を構成することは、この時期に「孫娘に授ける」「証本を作成する」といった目的を持ち、特徴的な字母を用いた結果とも考えられる。計量的な手法では、字母の出現傾向の相違を指摘することはできるが、字母の選択方針を変更した目的を考察することは難しく、この点で文学や文献学の知見が必要である。

加えて、古今和歌集貞応二年本といった、親本である定家筆資料自体は不明でありながら、奥書から定家筆の資料を忠実に書写したと考えられる、定家筆とは異なる筆跡の資料は、他の定家筆資料と、仮名字母の出現傾向の点で差がないことを示した。この結果から、国文学分野での「忠実に書写された資料である」という蓋然性が高い仮説と、計量的手法を用いた結果が矛盾のないことを明らかにした。これは、本手法を用いることで、国文学とは異なる根拠に基づいて、ある一部の資料に関しては、その仮説を検証し、新しい知見を得られる可能性があることを示している。

今回の調査結果から、定家の資料に関しては、定家自身の字母の選択方針を用いている可能性があることが明らかになった。しかし、他の人物が自分自身の字母選択方針に基づいて書写しているかは明らかではない。今後、調査対象とする資料を増やして、字母の調査を継続していきたい。

参考文献

- [1] 齊藤鉄也：仮名字母の出現頻度率に基づく藤原定家書写資料の年代推定，人文科学とコンピュータシンポジウム論文集，Vol.2016, No.2, pp.197-202 (2016).
- [2] 矢田 勉：国語文字・表記史の研究，汲古書院 (2012).
- [3] 表 章，後藤ゆう子：世阿弥の平仮名書の用字法の特徴(上)，野上記念法政大学能楽研究所 能楽研究，Vol.5, pp.1-90 (1980).
- [4] 小松茂美：古筆学大成 第二十九卷 論文一，講談社 (1993).
- [5] 井浦美幸：中近世における平仮名の字体—藤原定家の平仮名，東京女子大学 日本文学，Vol.37, No.1, pp.197-202 (1971).
- [6] 呉 文炳 (編)：定家殊芳，理想社 (1967).
- [7] 小松茂美：古筆学大成 第二十二卷 歌合二・定数歌・色紙，講談社 (1992).
- [8] 久曾神昇：仮名古筆の内容的研究，ひたく書房 (1980).
- [9] 天理図書館 (編)：新天理図書館善本叢書 第 6 卷 定家筆古記録，天理大学出版部 (2015).
- [10] 久曾神昇 (編)：伊達本古今和歌集 藤原定家筆，笠間書院 (1997).
- [11] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 古今和歌集嘉禄二年本 古今和歌集貞応二年本 第二卷，朝日新聞出版 (1994).
- [12] 松尾 聰 (解説)：御物本 更級日記，武蔵野書院 (1955).
- [13] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 拾遺愚草上 中 第八卷，朝日新聞出版 (1993).
- [14] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 拾遺愚草下 拾遺愚草員外 俊成定家詠草古筆断簡 第九卷，朝日新聞出版 (1995).
- [15] 久曾神昇 (編)：藤原定家拾遺和歌集，汲古書院 (2005).
- [16] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 後撰和歌集天福二年本第三卷，朝日新聞出版 (2004).
- [17] 育徳財団 (編)：土左日記，侯爵前田家育徳財団 (1928).
- [18] 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会 (編)：天理図書館善本叢書 和書之部 第四卷平安諸家集，天理図書館出版部 (1972).
- [19] 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会 (編)：天理図書館善本叢書 和書之部第三十五卷 平安時代歌論集，天理図書館出版部 (1977).
- [20] 古谷 稔 (解説)：日本名跡叢刊 33 鎌倉 藤原定家 近代秀歌，二玄社 (1979).
- [21] 日本古典文学会 (編)：奥入，日本古典文学刊行会 (1971).
- [22] 池田亀鑑 (編著)：源氏物語大成第十三冊 資料篇，中央公論社 (1985).
- [23] 藤原定頼：四条中納言集，侯爵前田家育徳財団 (1942).
- [24] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 平安私家集四 第十七卷，朝日新聞出版 (1996).
- [25] 紫 式部：源氏物語 - 花ちるさと・かしは木青表紙原本，前田育徳會尊經閣文庫，雄松堂書店 (1978).
- [26] 小松茂美：古筆学大成 第十九卷 私家集三，講談社 (1992).
- [27] 鈴木知太郎 (校注)：天福本伊勢物語，武蔵野書院 (1963).
- [28] 鈴木知太郎 (編)：御所本伊勢物語 冷泉為和筆 宮内庁書陵部蔵，笠間書院 (1971).
- [29] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 古来風鉢抄第一卷，朝日新聞出版 (1992).
- [30] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 平安私家集一 第十四卷，朝日新聞出版 (1995).
- [31] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 平安私家集三 第十六卷，朝日新聞出版 (1995).
- [32] (財) 冷泉家時雨亭文庫編：冷泉家時雨亭叢書 続後撰和歌集 為家歌学第六卷，朝日新聞出版 (1994).
- [33] 日本古典文学会 (編)：新勅撰和歌集，貴重本刊行会 (1980).
- [34] 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会 (編)：天理図書館善本叢書 和書之部第三十六卷 秋篠月清集，天理図書館出版部 (1976).
- [35] 児玉幸多 (編)：くずし字用例辞典普及版，東京堂出版 (1993).
- [36] 金 明哲：テキストデータの統計科学入門，岩波書店 (2011).
- [37] 井上宗雄 (編)：浅田 徹：「不違一字」的書写態度について，中世和歌 資料と論考，明治書院，pp.157-178 (1992).



齊藤 鉄也 (正会員)

1971 年生。1994 年慶應義塾大学総合政策学部卒業。1996 年同大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。2002 年同博士課程単位取得退学。2012 年淑徳大学経営学部准教授。古典籍の計量文献学の研究に従事。ソフ

トウェア科学会，中古文学会各会員。